

Großes Hebelfest と幸運な訳書 (Y. Kinoshita) [J]

今年 2010 年はヘーベル (Johann Peter Hebel, 1760–1826) の生誕 250 周年にあたる。ヘーベルの誕生祭 Hebelfest は毎年ヘーベルの故郷である上ライン地方でその誕生日である 5 月 10 日とその前後にハウゼン村を中心に祝われるのであるが、1860 年の生誕 100 周年を第 1 回として 25 年ごとに Großes Hebelfest が祝われてきた。今年は 7 回目ということになる。

私は今回は残念ながらこれに参加できなかったが、前回、すなわち 25 年前 1985 年の第 6 回 Großes Hebelfest に学期途中であったにもかかわらず、ゴールデンウィークをも利用して参加を敢行したのだった。そのとき私はヘーベルの暦話の翻訳をほぼ終えたばかりであったが、疑問の箇所がまだかなり残っていて、なんとしてもこの機会にヘーベル関係の人々に直接会って疑問をただし、訳稿をより完全なものにしたいと決意にも似た強い願いを持っていたからだった。

過日向こうに住む親しい知人から送られてきた地元の新聞報道から察するに、今回の Großes Hebelfest も前回のときとあまり変わらない様子なので、25 年前に私が直接見聞きした記念祭の様子を当時の手帳のメモをもとにここに報告し、あわせて個人的な思い出話をするをお許しいただきたい。

「J.P. ヘーベルほど (郷土の人々によって) 毎年感動的に祝われる作家はない」と言われるほど上ライン地方 (あるいは Markgräflerland) の人々の郷土詩人ヘーベルに寄せる親愛の念には格別強いものがあるが、とりわけヘーベルが少年時代を母子二人でつましく肩を寄せ合うようにして過ごしたハウゼン村では、その誕生日が毎年村を挙げて祝われる。ハウゼン村 (Hausen im Wiesental) はシュヴァルツヴァルトの南端に位置し、スイスのバーゼルの北東二十数キロにある、人口二千数百の寒村で、Hebelfest の前日村に到着した私は早速村役場に村長の Vogt さんを表敬訪問した。そして Vogt さんから紹介していただいた、村に二つしかない Gaststätte (居酒屋兼宿屋) のひとつ Café Läubin に旅装を解いたのだった。

その前々日私は、ハウゼン村が行政上属する郡の中心都市で、ヘーベル自身若い時教師として過ごした町——その学校は今日 Hebel-Gymnasium と改称して存する——レラッハ (Lörrach) を訪れていた。レラッハはヘーベル協会 (Hebelbund) の事務局があり、またヘーベル関係の文献や資料を収蔵する博物館 Museum am Burghof のあるところで、私はこの小さな博物館の館長でヘーベル協会の役員でもある Moehring さんとあらかじめ連絡を取っていて、翻訳上の疑問点をただすべく博物館を訪ねたのだった。Moehring さんは博物館

所蔵の当時の衣装や貨幣まで取り出してきて、こちらが用意したたくさんの質問に一々懇切丁寧に答えて下さったのだった。それゆえ翌日ハウゼンに着いたときにはもう旅の目的は事実上達せられていたのであり、今は村人とともにこの祝祭的気分身を任せればよいのであった。

朝6時、小白砲(Böller)を合図に Fest が始まる。村の楽団 Hebelmusik の奏でる吹奏楽の音が祭り気分をかきたてる。家々の戸口や窓はどこもかしこも小旗とトウヒ (Fichte) の枝で飾られている。11時半には大勢で近くの鉄道駅にバーゼルからのお客様を迎えに行く。ヘーベルが呱呱の声をあげたバーゼルにはヘーベル財団 (Hebelstiftung) があり、毎年 Hebelfest に参加するこのバーゼルからのお客様を駅に出迎えるのが仕来りになっている。簡単な歓迎のセレモニーの後、伝統的な民俗衣装を身にまとった子供たちや Hebelmusik を先頭に村人たちは行列を作って、バーゼルからのお客様とともに村の Festhalle (フェスティバルホール) まで行進する。

12時、聴衆でいっぱい村の Festhalle でいよいよ祝典が始まる。この記念行事の主催者である村長の Vogt さんが開会の挨拶をし、その際、日本から遠路はるばるやって来たということで私も紹介を受ける。(ちなみに前夜 Vogt さんのご自宅に夕食の招待をいただいたのだった。) Hebelfest では隔年に Hebelpreis (ヘーベル賞) の授与式が行われるのであるが、この年はそれに当たらなかった。(Hebelpreis については後で述べる。) 引き続き音楽の演奏や合唱、ヘーベルの作品を題材とした寸劇、少年少女によるヘーベルの『アレマン詩集』からの朗読などアトラクションが行われる。

そのあと午後2時から恒例の Hebelmähli と呼ばれる昼食会が催され、私は村長夫妻と同じテーブル、ヘーベル終焉の地となった Schwetzingen の町長の隣に席を与えられるという光栄に浴した。この昼食会が終わった後だった。まるで待ちかねたように地元の新聞記者やヘーベル関係の出版者らに取り巻かれ、どうしてヘーベルを知るようになったのか、なぜヘーベルに関心があるのか、日本におけるヘーベル紹介の現状はどうかなど、矢継ぎ早に質問を浴びせられたのだった。

午後3時から50を超えるグループが参加する Festumzug (祝賀パレード) が始まっていた。馬車の上ではヘーベルの作品からの一場面や当時の生活の再現がなされたり、民俗衣装の子供たちや婦人たちの行列が賑々しく行われた。(男性の場合はナポレオン時代の兵隊服すがたが多かった。)

午後5時、大テントではコンサートが始まり、村人は陽気なバンドの演奏が流れる中、ビールやソーセージでうきうきとした祝祭的な時間を過ごす。そしてここでも私は好奇心

に満ちた人々から次々と話しかけられ、競い合うように招待攻めにあったのだった。自分たちの郷土の誇りである詩人に関心を持ってくれる遠い異国の人間に対する感謝と喜びがこの尋常でない好意の源にあったのは間違いないだろうが、そもそもこの都会から遠くはなれた僻遠の地で日本人を見るなど初めてという人も多かったのにちがいない。しかしその珍しさだけでなく、年配の人々の中には言いようのない懐かしさとともに握手を求めてくる人もいたのだった。ずいぶん多くの人が 25 年前に訪れた日本人のことを憶えているのだ。それはアレマン詩集を訳された故余川文彦氏のことだった。そして今回の **Großes Hebel fest** 参加に際し、ヘーベル協会に連絡を取るようお勧めくださったのも実は当時広島大学におられた余川氏だった。余川氏とは文通を交わすだけでつい一度も直接お目にかかってお礼を申し上げる機会を得ずに終わったが、まさに先学の余慶にあずかっていることをこのとき痛切に認識した次第だった。

その夜私はいたるところでもみくちやの歓迎にあった。**Café Läubin** でも、またその後連れて行かれたもうひとつの **Gaststätte** である **Zum Löwen** でも。この好意をむき出しに表す素朴な村人たちに私はいつしかヘーベルの暦話の世界の人々に会ったような懐かしさを覚えていた。そして夜遅く宿に戻りベッドにもぐり込んだとき、この一日の感動を思い返し、この人々から示された忘れがたい好意に応えるためにはなんとしても翻訳を完成させねば、と心に誓って眠りについたのであった。

二度目にヘーベルの故郷を訪れたのは 1992 年 5 月のことだった。それはハウゼン村でなくヘーベル協会のあるレラッハで、このとき私は同市の **Stadthalle** (公会堂) で催されたヘーベル協会主催の毎年恒例の行事「**Schatzkästlein**」——ヘーベルの暦話集のタイトル『**Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes**』にちなむ——において満員の聴衆を前に記念講演 (**Festvortrag**) を行い、同時にその年度のヘーベル感謝賞 (**Hebeldank**) を頂くことになったのだった。先に **Hebelpreis** のことを言ったが、これはバーデン・ヴュルテンベルク州が 2 年ごとに与える文学賞で、その受賞者のリストにはアルバート・シュヴァイツァーやマルティン・ハイデガーといった名も見える。これに対して **Hebeldank** はヘーベル協会が毎年ヘーベルの名と精神を広めるのに功績のあった者に対して授与するものである。(このときの講演と謝辞はヘーベル協会が発行する **Schriftenreihe** 第 39 号に収録されている。)

私が 1985 年の **Großes Hebel fest** に参加したのはヘーベルの暦話の訳稿を完成させるためだったと先ほど述べたが、その訳稿は翌 1986 年春『ドイツ炉辺ばなし集』というタイトルで岩波文庫の一冊として無事刊行されたのだった。そしてこの小さな本は思いがけず大きな反響を呼び起こしたのであった。その反響の知らせはたいへんお世話になったヘーベ

ル協会の方々をいたく喜ばせ、喜びと感謝のしるしにご褒美を下さることになった次第だった。

実際こんなに多くの（私には奇蹟としか思えない）幸運に恵まれた訳書もないのではあるまいか。刊行直後に評論家の川村二郎さんに書評で取り上げていただき（『朝日ジャーナル』）好意的な紹介をいただいた。翌1987年4月の岩波文庫創刊60周年記念『私の三冊』では、川村氏とともに独文出身の先輩として敬愛する作家の中野孝次さんに第一番に取り上げていただくという思いもかけぬ幸せに浴した。また訳者あとがきの末尾で述べた大それた希望（「これらの暦話が学校の教室でも読まれ、種々議論の材料となることをひそかに願っている。」）も早速実現することになり、訳書刊行の翌年春には「なおった病人」が2年生用の、また「うずら」が3年生用の中学の道德の教科書（副読本、いずれも『文溪堂』刊）に採られ、毎年数万人の日本の中学生にヘーベルの物語が親しまれることになった。さらにはNHK教育テレビでも「歩哨中の結婚」が人形劇として放映され（1989年3月、『およめさんもらっちゃった』と改題）、幼い子供たちにまで親しまれることになったのだった。

この訳書が得た反響の紹介はこれくらいにするが、訳者である私自身この翻訳のお蔭で思いもかけず *Hebeldank* をいただき、さらにはそれに関わって面映くも *Pressekonferenz*（記者会見）や新聞のインタビュー（『Basler Zeitung』に写真入りで掲載）、あるいはラジオ出演（*Südwestfunk*）など柄にもない一生に一度の経験をさせていただいたのだった。

今年の *Großes Hebelfest* には残念ながら参加できなかった、と初めに書いたが、たとえ参加していたとしても25年前の前回のような感激を味わうことはとうていできなかつたろう。そのことを私はよくわかっていたのだ。あれは、これから生きていこうとする者にしか味わえぬ、人生のレースをおおかた走り終え、定年を間近に控えた者には決して味わうことのできぬ感激なのだから。

（下手をすると自慢話になりかねないものも、20年の歳月の浄化作用でいわば時効ということで、年寄りの懐旧談としてお聞き逃しただけようか。なお、ヘーベル協会に関心を持たれる方は以下のWEBサイトを覗いてみてください。 *Willkommen beim Hebelbund Lörrach* URL : <http://www.hebelbund.de/>)

木下 康光（同志社大学）

0069

作成日 : 2010/08/31